

# イタリアにおける中学校音楽科の義務教育化と音楽教育法に関する研究 —1963年プログラムに関連した教科書と「音楽教育の手引き」に着目して—

大野内 愛  
(広島文教女子大学)

## Compulsory Education in Italian Middle School Music Departments and the Music Education Act: Textbooks Associated with the 1963 Program and *Guide to Music Education*

Ai ONOUCHI

### Abstract

This paper aims to clarify the requirements for music education as part of general education in Italy through an assessment of the 1963 program, the music textbooks published by Ricordi during the implementation of that program, and the *Guide to Music Education* textbooks. I found that the textbooks focused on music theory, although the 1963 program emphasized practical training of students with a love of music. Further, the *Guide to Music Education* series was published specifically for use in the classroom, where music teachers ought to be familiar with technical aspects of music. The series also plays a role as a manual that can be used in more professional classes; for such classes, textbooks generally either treat the content as being of minor importance or fail to cover it altogether. The following three points may be considered with regard to music education today. First, it is necessary to cultivate a love of music in students. Second, it is important to teach a wide range of music. Third, it is especially necessary to equip students with a basic knowledge of music. The *Guide to Music* series may help in achieving those objectives.

### I 研究の動機と目的

イタリアにおける中学校音楽科は、1963年プログラム<sup>1)</sup>において義務化された。小学校では1894年に「歌唱」科が義務化された<sup>2)</sup>が、中学校ではそこから約70年遅れての実施となった。小学校においては「歌唱(canto)」科という名称で歌唱教育を中心としていたが、1960年代からは鑑賞教育も教育に含まれるようになったため、1963年プログラムでは、教科名は「音楽教育(educazione musicale)」となった。

中学校音楽科が義務化されたことにより、さまざまな音楽教育方法に関する書籍が出版されたが、本論文ではRicordi社が出版した「音楽教育の手引き」シリーズに着目する。Ricordi社は、ミラノに本拠地を置く楽譜出版社であり、楽譜以外にも音楽関連の書籍を多く出版している。音楽院などの専門教育の教則本も多く出版しているが、そのRicordi社が、中学校音楽科の義務教育化に際して、音楽教育法について出版したものが、この「音楽教育の手引き」シリーズである。

本論文では、1963年プログラムおよび、プログラムの施行に際してRicordi社が出版した音楽科教科書、また「音楽教育の手引き」を概観することにより、当時の普通教育における音楽教育に求められていたことについて明らかにすることを目的とする。

### II 1963年プログラムにおける「音楽教育」の概要

1963年プログラムでは、教科名は「音楽教育」とされ、学習活動としては、「音楽と生活との関わりの

学習」「リズム練習（器楽演奏<sup>3)</sup>）」「合唱演習」「音楽理論の学習」「鑑賞」の5つが定められている<sup>4)</sup>。「音楽教育」は1学年のみ必修であり、2・3学年は任意とされている。

このプログラムでは、音楽は表現手段の1つであるとし、生徒に音楽への愛好心を引き起こすことを目的としている。そのための方法として、歌唱や鑑賞での活動に用いる楽曲は、生徒の精神的な成熟に適応したもの、歴史や文化を理解しやすいもの、民衆のものなど、さまざまなジャンルから選択していくことを指示している。

Festa は、このプログラムの重要な点として、「宗教や演劇や交響曲や室内楽の楽曲を優先的に扱うよう指示したこと」(Festa 1998, p.29) を挙げている。また Delfrati はこのプログラムの課題として、「読み書き計算の古典的な能力の育成に偏っている」(AA. VV. 1985, p.38) と述べている。

Delfrati が指摘したように、第1学年では「音の長さや高さ」、第2学年では「変化記号、付点、スラー」「階名唱」、第3学年では「調性、旋律、対位法、ハーモニー」といった文言が含まれており、連続的に知識の育成を求めていることがわかる。しかし、第1学年のみが義務であるということから考えると、第1学年の内容は、日常生活と音楽の関連、クラシック音楽の鑑賞、よく知られた文や詩のリズム練習、民衆の音楽の模倣による合唱練習、声域の知覚、音の長さや高さの知覚、というように、音楽的にあまり深い内容を指示してはならず、選択する楽曲についても親しみやすいものを扱うよう指示している。これは、もともとこのプログラムが目的としている「音楽への愛好心」を引き起こすということにつながっていると考えられる。

3年間の学習内容を連続的に示すと以下のようなになる。

表1 1963年プログラム「音楽教育」の内容の連続性

学習内容	第1学年	第2学年	第3学年
音楽と生活との関わりの学習	音楽と生活との関わり		
リズム練習	言葉に合わせた練習	打楽器の使用	2つのパート
合唱演習	クラシック曲、民衆の歌	スラーや付点を使用、2声のもの	カノン、2声のもの
音楽理論の学習	音の長さ、高さ	階名唱、音の長さや高さに付随するもの	楽器の分類、声の分類、調性、対位法、和音
鑑賞	クラシック曲	クラシック曲、作曲家	クラシック曲、音楽の形式

### Ⅲ 1963年プログラムに準拠して出版された教科書の内容

本論文では、1963年プログラムに準拠して出版された中学校音楽科教科書として、*Educazione musicale* (Allorto-Zecchi 1964) を扱う。本教科書は、164ページから成るものであり、楽譜出版を主とする Ricordi 社から出版されている。

#### 1 *Educazione musicale* の構成

第1部では、文章による説明が主であり、鑑賞を含む。「自然における音楽」の部分では、自然と音楽の関係や自然の中にある音などについて説明している。「音楽と人間」では、人間が作り出したリズムや声や歌、楽器について説明している。「声楽音楽」では、実技は伴わず、説明のみで合唱の歴史や分類、独唱などについて説明している。「器楽音楽」においてもやはり実技は伴わず、器楽音楽の歴史について簡単に説明している。「楽器の分類」「オーケストラ」「偉大な作曲家」では図を用いながら、文章で説明している。

第2部は、実技（歌唱）を伴いながら、音楽の基礎的な理論を学んでいく部分である。音符の名前から調性や旋法などまでが段階的に学べる構成となっている。

第3部には、合唱曲の楽譜が掲載されている。

#### 2 学習活動別の内容

##### (1) 音楽と生活との関わりの学習

音楽と生活との関わりについては、第1部の初めに詳しく述べられている。

聴覚に関する学習として、音現象には、人の声、動物の声、騒音、楽音があるとし、その1つ1つに

ついて説明がなされている。また、その中でも楽音に着目すると、音楽とは音を使った言語であると述べられている。つまり音を介した感情表現である。その音楽ができることとして、声楽、合唱、器楽、合奏を挙げ、さらにジャンルとしては、宗教的なものもあれば、世俗的なものもあるとしている。最後は器楽に焦点を当て、自然にあるもの（木や竹など）での楽器の製作の可能性を紹介しながら、楽器の種類について簡単に説明している。(Allorto-Zecchi 1964, pp.1-4)

## (2) リズム練習

リズム練習については、第2部の冒頭の部分に掲載されている。

まずクラス一斉に簡単な音符（2分音符や4分音符）で書かれたリズムを、指示されたとおりに左右の手を使って打楽器を叩いていく練習から始まる。それから8分音符へとリズムがどんどん細かくなり、さらには、クラスを2グループに分割して同時に叩かせるなどの練習へと進んでいく。(Allorto-Zecchi 1964, pp.41-46)

リズム練習のみの部分は以上であるが、後半の合唱演習の際に、伴奏として打楽器を使用し、リズムを打つという練習も含まれている。(Allorto-Zecchi 1964, pp.95-100)

## (3) 合唱演習

2～3部に分かれての合唱の楽曲については掲載されているが、どの曲も音楽理論を学ぶための手段としてのみ用いられている。そのため、発声や器官などについても触れられておらず、カノンの練習やポリフォニーの練習をすることが主である。また巻末の曲集では、斉唱の曲が多く、部分的にハーモニーになる曲もあるが、「合唱曲」と呼べるものはほとんど掲載されていない。(Allorto-Zecchi 1964, pp.127-159)

## (4) 音楽理論の学習

164ページから成る本教科書において、最も多くのページ数が割かれているのが、この音楽理論の学習である。まずリズム、音価、音高など基本的な事柄について学習し、その後、記譜法、階名唱、拍子、音程関係、特殊なリズムについて学習する。さらにはリズムを用いた対位法の学習や調性、旋法について段階的に学ぶ。(Allorto-Zecchi 1964, pp.46-123)

階名唱については、音高をつけない階名唱や、拍子は指定されているが小節線が引かれていない楽譜の階名唱などの練習が掲載されている。

カノンやポリフォニーの歌についても説明がなされており、最大4声に分かれて演奏する楽譜が掲載されている。

## (5) 鑑賞

本教科書にはディスクが8枚ついており、題材によって分けられている。1曲すべて入っている教材もあれば、部分的に入っているものもある。モーツァルト、ベートーヴェン、バッハ、サン＝サーンス以外はイタリアの作曲家であり、特にオペラからの選曲が多い。

題材としては、音楽と生活に関わる分野、歌唱形態に関わる分野、器楽に関わる分野の3つが存在し、その他音楽史などの分野についての鑑賞教材は準備されていない。

## IV Ricordi 出版「音楽教育の手引き」シリーズの内容

Ricordi社は、1963年プログラムの制定を受け、音楽学研究者であったAllorto監修の「音楽教育の手引き」シリーズを出版した。Allortoはボルツァーノ音楽院、パルマ音楽院、ミラノ音楽院の音楽史を担当する教授であり、音楽に関する定期行物 *Ricordiana*, *Musica d'oggi*, *Enciclopedia della musica Ricordi* の編纂者であるだけでなく、音楽教育に関する定期行物 *Educazione musicale* を監修していた人物である。

本シリーズの中から1963年プログラムに示されている学習活動に関連する内容を概観する。

## 1 文献の概要

### (1) *Il direttore di coro* (Zecchi 1965) の概要

本書では合唱についての内容を示している。第1部では理論、第2部で演奏について指示しており、具体的には、第1部では、合唱における専門用語とその定義、発声に関する器官、息と呼吸、声、音声学、発音、合唱の種類とスタイルといった、歌うことについての理論的な内容を扱っている。第2部では、声の分類、楽曲解釈、合唱指揮者の資質、スコアの学習、指揮の方法、合唱形態と配置、合唱曲といった、合唱を演奏することについての内容を扱っている。

### (2) *L'educazione ritmica* (Allorto-Perrotti 1965) の概要

本書ではリズム教育についての教育法を示している。第1部では基礎、文法、教育法について、第2部では実習と練習について指示している。具体的には、第1部では音楽のリズムと生活におけるリズム、リズムと韻律、リズムの基本原則、話すソルフェージュ、リズム教育とそのための楽器についての内容を扱っている。第2部ではさまざまなリズムの練習、リズムの重奏、リズムの歌への応用、カノン、リズムと言葉などについて実習を交えての内容を扱っている。

### (3) *Introduzione all'ascolto* (Graziosi 1965) の概要

本書では鑑賞教育の方法について示している。初めに鑑賞の基礎的なことについて説明しており、それからさまざまな主題での鑑賞曲の鑑賞教育方法について説明している。特に鑑賞の目的を明らかにすることの重要性を主張している。

### (4) *Gli strumenti musicali* (Rattalino 1968) の概要

本書では主に楽器について紹介している。楽器の分類システムについて説明した後、フルート、ダブルリード、シングルリード、金管楽器、撥弦楽器、打楽器、鍵盤楽器、擦弦楽器、自動演奏楽器と電子楽器といった種類ごとに楽器について紹介している。

## 2 「音楽教育法の手引き」シリーズにおける各学習活動の教育法

### (1) 音楽と生活との関わりの学習

本シリーズでは、音楽と生活との関わりの学習について、ほとんど触れていない。*L'educazione ritmica* では、音楽と生活について、リズムに特化して述べているため、その部分について論じる。

本書では、「リズム」というものの重要性は以前よりも増しており、それは特にロマン派の時代からオーケストラにおける打楽器の多様などに見られてきたと述べている。もともとリズムには自然の力学が働いており、自然のリズムや人間の鼓動など、常に我々の周りにリズムというものが存在していることにも触れている。(Allorto-Perrotti 1965, pp.9-12)

しかし、具体的にこの学習活動についての指導方法を表した内容は見られない。

### (2) リズム練習

本シリーズにおいては、特に *L'educazione ritmica* (Allorto-Perrotti 1965) で、リズム練習の方法について詳しく説明している。

本書では、リズムの基本はリズム・オスティナート<sup>5)</sup>(持続リズム)であるとし、「単純なリズムを繰り返し行うことによって、生徒たちは変化したリズムにも対応できる」(Allorto-Perrotti 1965, p.61)と述べられている。さらに、基準のテンポとしては4分音符 = 84 ~ 88 が望ましいとしている。また使用する楽器は、タンバリン、カスタネット、トライアングル、シンバル、太鼓、クラベスを指示しており、楽器を指定しているリズム練習もあれば、特に指示していない練習もある。

基本的な練習の順序としては、以下のようになっている。

- ① 2/4 拍子, 3/4 拍子, 4/4 拍子, 6/8 拍子で1小節のリズムを繰り返す練習
- ② 2/4 拍子, 3/4 拍子, 4/4 拍子, 6/8 拍子で2小節のリズムを繰り返す練習
- ③ 2/4 拍子, 3/4 拍子, 4/4 拍子, 6/8 拍子で4小節のリズムを繰り返す練習

- ④3つのグループに分かれてのリズム練習
- ⑤歌への応用
- ⑥対位法の練習—模倣とカノン—
- ⑦リズムと言葉の関連についての練習
- ⑧ソロとトゥッティでの練習
- ⑨歌に打楽器での伴奏をつける練習

(3) 合唱演習

本シリーズにおいては、*Il direttore di coro* (Zecchi 1965) に詳細に示されている。

①声器官の学習

本書では、発声器官について詳細に示している。まず、胸腔について図示しており、胸部にある鎖骨から肋骨までの骨の位置や名前について、紹介している。それから、咽頭・気管・気管支についても図示し、咽頭の骨、甲状腺軟骨、輪状軟骨等を説明と共に示している。また、肺の部分についても図示し、左右の肺への分岐点はどこか、肺に上部・中部・下部があることなどを説明している。最後に口から喉の部分を図示し、後鼻腔、蝶形腔、舌骨の筋肉組織、喉頭蓋、声帯など、共鳴する部分について詳しく示している。どの部分についても、1つ1つ文章でしっかり説明を行っている。(Zecchi 1965, pp.12-17)

②呼吸の学習

基本的に腹式呼吸を行うことを指示しているが、ここでは、日本で言う腹式呼吸のことを「横隔膜呼吸 *respirazione diaframmatica*」、胸式呼吸のことを「胸部呼吸 *respirazione toracica*」と示している。胸部呼吸は肋骨の下部や中央部しか使わないものであるが、それは歌唱には適さないと述べている。オペラ歌手を例に挙げ、オペラ歌手は横隔膜を使わなければ不可能なほど、多くの息が必要であり、横隔膜呼吸を身に付けるためには、できるだけ胸腔を広げるための呼吸の練習を行わなければならないと示している。

具体的には、横隔膜呼吸は深く息を吸うと腹部が上がり、胸部呼吸は息を吸うと腹部がへこむことを図示しながら示している。(Zecchi 1965, pp.19-20)

③発声練習の方法

発声練習としていくつかの方法を紹介している。まず、ピアノを用いた母音唱での練習である(図1参照)。もっとも歌いやすい調からスタートし、無理のない高音まで半音ずつ移調していき、それからだんだん低い音まで移調する。

それから本書では、生徒たちの歌唱技術の向上のために、アルペジオとアジリタの練習が必要であると述べている(図2参照)。アルペジオの部分は母音唱で行い、残りは nu の発音でアジリタの部分を歌唱する。

nu と発音する根拠として、声楽的テクニックとしての「マスケラ in maschera」を挙げている。マスケラを意識するための練習(図3参照)では、「u-o-a-e-i」の母音を同じ音で歌っている。この母音の順は、暗い母音から明るい母音へと並べられたものである。その際に、できる限り口や顔の前の方を意識するように述べられている。特に咽頭の上部の空洞を鳴らすように音を運ぶことが大切だとされている。注意点としては、初学者にはできるだけ piano で歌わせること、だんだん



図1 母音唱での発声練習



図2 アルペジオとアジリタの練習



図3 マスケラを意識した発声練習

mezzoforte や forte にしていくことを示している。(Zecchi 1965, pp.58-62)

#### ④合唱指揮者の資質

本書では、合唱指揮者に必要なものとして、以下の11点を挙げている。

a) 良い耳	g) 合唱の対位法、ハーモニー、ジャンルを形づくるもの、合唱の歴史など音楽の文化の知識
b) 際立ったコミュニケーション能力	h) スコアやピアノ譜を良く読む知識
c) 感情を態度やジェスチャーで表現することができるような指導者の能力	i) 声楽的能力
d) 教育的能力	l) 合唱経験
e) 忍耐力、自信、落ち着きのなさの欠如	m) 潜在的な素質が強化された指揮者の技術
f) 組織的素質	

音楽的能力として、「良い耳」「楽譜を読む知識」「声楽的能力」「指揮者の技術」「音楽文化の知識」「合唱経験」、人間的能力として「コミュニケーション能力」「教育的能力」「忍耐力、自信、落ち着き」「組織的素質」を挙げている。つまり、教師としての能力とともに、合唱を専門的に指導する際の能力が加えられている。(Zecchi 1965, pp.81-83)

#### (4) 音楽理論の学習

音楽理論の学習については、他の学習活動と連動して行われることも多く、本シリーズ内に音楽理論についてのみ扱っているものはない。シリーズ内の各書籍から、音楽理論の学習に特に関わる内容について紹介する。

##### ①記譜上の理論の学習

音の長さやそれに付属するものについては、*L'educazione ritmica* (Allorto-Perrotti 1965) において詳細に説明されている。音価などの理解は、リズム練習の中で同時に行われているものであり、前述したため、ここでは省略する。

##### ②楽器の分類の学習

楽器の分類については、*Gli strumenti musicali* (Rattalino 1968) において詳しく説明がなされている。本書での分類について以下に示す。表2で示されている楽器について、構造や音色、参考演奏を紹介している。

表2 楽器の分類

フルート系	ダブルリード	シングルリード	金管楽器	撥弦楽器	打楽器	鍵盤楽器	擦弦楽器	電子楽器
リコーダー フルート	オーボエ ファゴット	クラリネット サクソフォン	ホルン トランペット トロンボーン フリューゲルホルン	ハープ リュート マンドリン ギター その他	ティンパニ タンバリン 木製打楽器 鉄製打楽器	オルガン チェンバロ ピアノ その他	古いヴィオラ ヴァイオリン 現代のヴィオラ チェロ コントラバス	自動演奏楽器 電子楽器

##### ③声の分類の学習

声の分類の学習については、*Il direttore di coro* (Zecchi 1965) にその内容が含まれている。それぞれの声は、音色が異なるだけでなく、声域も異なっており、正しく分類すべきであると述べられている(Zecchi 1965, pp.62-63)。声種の分類としては、ソプラノ、メゾソプラノ、コントラルト、テノール、バリトン、バスという一般的な分類である。本書によると、各声種の声域として、ソプラノがh3～c6、メゾソプラノがas3～g5、コントラルトがf3～f5、テノールがc3～h4、バリトンがa2～g4、バスがf2～f4を参考として示している。

#### (5) 鑑賞

本シリーズでは、*Introduzione all'ascolto* (Graziosi 1965) において、鑑賞教育について詳細に指導方法が述べられている。

鑑賞教育の意義として、第1点は文化的な精神を形成すること、第2点は感性を育成すること、第3

点は鑑賞による音楽理論の理解、第4点は思春期前期の生徒の人間形成であると述べている（Graziosi 1965, pp.9-13）。さらに注意点として、内容至上主義にならないよう喚起している。音楽を聴いて、レポートを記述したり、解説したりするだけでは、純粋に感じるということを妨げてしまう。とはいえ音楽の基礎的要素について学習することや、作曲された背景を知ることにより、生徒は音楽の本質的な面を理解することができることも確かである。そのバランスに注意するよう示されている（Graziosi 1965, pp.17-19）。

さらに鑑賞教育の4つの指導方法を以下に示す。

#### ①テーマに焦点を当てた鑑賞

まず初めに曲の一部を聴取させるが、これは生徒の注意をひくことが目的である。その目的を達成するために、教師はどの部分を鑑賞させるのかをじっくりと考えなければならない。鑑賞教育の第一段階として、このタイプの鑑賞教育を行うことにより、生徒の聴覚感覚を敏感にすることが求められている。それと同時に、想像力を身に付け、想像的な面から音楽教育を行うことができると述べられている。（Graziosi 1965, pp.23-58）

#### ②音楽への興味をひくための鑑賞

このタイプの鑑賞では、「音楽で教育する」か「音楽を教育する」かと言えば、後者に属する。音楽的に重要な作品を扱うことにより、容易に音楽そのものを価値づけることができる。このタイプの音楽では、情緒的・想像的・文化的な内容についてではなく、音楽そのものに興味を持たせることが大きな目的であると述べられている。（Graziosi 1965, pp.65-94）

#### ③音楽の要素や演奏形態の学習のための鑑賞

まず、音楽の要素を学習させるために適した楽曲として、「ボレロ」が紹介されている。「ボレロ」の特徴的なリズム、旋律、調性、音色、強弱記号、速度記号について学習することをとおして、音楽の要素を理解する。そうした目的を達成するために、「ボレロ」を用いて、押さえるべきポイントを明確に示している。（Graziosi 1965, pp.101-113）

また、合唱やオペラという演奏形態を学習するための楽曲も紹介されている。

#### ④歴史を学習するための鑑賞

このタイプの鑑賞教育は、時代の移り変わりを、鑑賞をとおして学習させるという方法であり、音楽の形式や作曲家などを学習するにあたり、特徴的な楽曲を紹介している。（Graziosi 1965, pp.119-133）

## V 総括

まず、1963年プログラムでは、「音楽への愛好心」を培うことが第1の目的とされていた。その目的を受けて、「音楽教育」のプログラム内容では、音楽と生活との関わりに着目させたり、音楽理論の学習においてもできるだけ初歩の易しい内容を扱うなど、音楽を愛好する精神を養おうとする思いが見られる。1963年プログラムにおいて指示されている学習活動としては、「音楽と生活との関わりの学習」「リズム練習」「合唱演習」「音楽理論の学習」「鑑賞」の5つの活動が挙げられる。この5つの活動における学習内容では、学年ごとに連続性が見られた。

そこで1963年プログラムにおける5つの学習活動に焦点を当てて、音楽科教科書および「音楽教育の手引き」シリーズについて分析を行った。

まず「音楽と生活との関わりの学習」について「音楽教育の手引き」シリーズには、この学習活動に関する記述はほとんど見られなかった。しかし教科書においては、割かれているページ数は多くはないが、身近な音に気付かせたり、身近な物で楽器を製作させたりと、より音楽を学習し始める段階で、音楽を身近なものとして捉えられるような内容が掲載されていた。このことがマニュアルである「音楽教育の手引き」シリーズにあまり掲載されていない理由としては、こうした学習内容については、音楽の専門的知識の必要性と必ずしも関連しないからであると考えられる。特にマニュアルがなくとも、授業を行うことが可能であるからではないだろうか。

次に「リズム練習」について概観すると、教科書においても「音楽教育の手引き」シリーズにおいても、しっかりと扱われていた。特にこの学習活動については、「音楽教育の手引き」シリーズにおいてかなり詳細に説明されており、まず短い小節数でのリズムパターンの練習から、リズムでの重奏、歌への応用、

団体から個人での演奏というように、学習の流れも明らかにされている。教科書では、その学習の流れが短くまとめられているが、リズム練習は合唱演習のための前段階であるという扱いであり、あまりリズム練習にこだわってはいない。

「合唱演習」については、教科書においてはあまり詳しく扱われていない。2～3声での合唱練習ができる楽曲は数曲掲載されているが、それにとどまっている。それに反して「音楽教育の手引き」シリーズでは、非常に詳細に説明がなされている。発声器官から、共鳴のための器官、呼吸器官など、図示しながら丁寧な説明が行われている。さらに、実際の授業で用いることのできる、発声練習の方法についても紹介しており、学校教育における指導を視野に入れた内容を述べながらも、声楽の専門的な知識にも触れている。さらに合唱指揮者の資質についても簡潔に示しており、音楽的能力のほかにも人間的能力にも触れていることは特筆すべきことである。

「音楽理論の学習」については、教科書で非常に詳細に述べられている。「リズム練習」や「合唱演習」と関連させて掲載されていることも多いが、基本的には階名唱を伴っている。非常に易しい内容から旋法の説明まで、段階的に学習できるような構成となっていた。それに反して「音楽教育の手引き」シリーズでは、楽器の分類についての独立したマニュアルがあるものの、その他、記譜に関する内容などについてはあまり詳しく扱っていなかった。

「鑑賞」については、小学校においても導入されたのは1955年プログラムからであり、この活動自体が新しい学習活動として位置づけられている。教科書においては、約40曲の鑑賞教材が準備されている。学習指導要領では、鑑賞分野について作曲家や音楽の形式に関連させることを求めているが、教科書においては作曲家や音楽の形式を学習するための鑑賞教材は準備されていない。「音楽教育の手引き」シリーズでは、鑑賞の方法を4点挙げ、さらに適切な鑑賞曲とその指導法についても紹介している。

学習活動別に概観すると、教科書と「音楽教育の手引き」シリーズには重要視している内容に差が見られた。教科書が重点を置いていたのは「音楽と生活との関わりでの学習」「音楽理論の学習」であり、「音楽教育の手引き」シリーズが重点を置いていたのは「リズム練習」「合唱演習」「鑑賞」である。つまり、教科書の内容は、音楽の理論についての学習に偏ったものであり、それに反して、「音楽教育の手引き」シリーズの内容は、より音楽の専門性に偏ったものであると言える。

1894年から小学校でも歌唱を中心として音楽教育が行われていたが、中学校で義務化されたのはこの1963年からであり、音楽教育が義務化されるまでは音楽教育は音楽院などの専門教育機関が担っていた。つまり、中学校において音楽教育が義務化されるにあたり、実際に教育現場に立つ音楽科教員に戸惑いがあることは容易に想像できる。専門教育機関の生徒と普通教育機関での生徒では、音楽に対する興味も音楽の能力もさまざまであるからだ。1963年プログラムで教育すべき内容について明記されたとしても、教える側にとって困難だと感じるのは、その教育方法である。

つまり教科書においては、1963年プログラムが掲げる、音楽を愛好する生徒を育成するための内容に重点を置きながらも、音楽の基礎である理論の部分を重点的に学習させ、その他の部分についても、重点は置いていないが触れることのできるような掲載の方法をとっていると考えられる。また、「音楽教育の手引き」シリーズについては、授業で扱わずとも音楽科教員が理解しておくべき音楽の専門的内容について、特に重点的に掲載し、教科書であまり重要視していない内容や、掲載されていない内容についても、より専門的に授業を行うことができるようなマニュアルブックとしての役割を担っているのではないだろうか。

以上の結果から、この時代の音楽教育に求められていたこととして、以下の3点が考えられる。第1点は音楽を愛好する生徒を育成すること、第2点は音楽について幅広く学ばせること、第3点は特に音楽の基礎的知識を身に付けさせることである。「音楽の手引き」シリーズは、こうした目的を達成するための、付加的役割を担っていると考えられる。

## 注

- 1) 本論文で扱う「プログラム」とは、日本の「学習指導要領」にあたるものである。
- 2) このときはまだ「歌唱」は独立した教科ではなく、「絵画・歌・体育・作業」という科目に含まれたものであった。「歌唱」科が独立したのは、1945年プログラムからである。

- 3) リズムの練習が主であるが、2年次にはパーカッションの使用について示している。
- 4) 実際には「音楽と生活との関わりの学習」や「音楽理論の学習」は、その他の学習活動と共に行われることもあるが、イタリアにおいては音楽活動を伴わない学習活動も存在するため、この2つについては独立して扱うこととする。
- 5) リズム・オスティナートとは、同じリズムを変化させずに絶えず叩き続けることである。

#### 引用・参考文献

- ・ Festa, D. (1998) *Educazione musicale nella scuola*, La scuola
- ・ AA. VV. (1985) *L'Insegnamento Musicale in Italia, Annali della Pubblica Istruzione*, Le Monnier, Firenze
- ・ Allorto, R.-Zecchi, A. (1964) *Educazione musicale*, Ricordi
- ・ Zecchi, A. (1965) *Il direttore di coro*, Ricordi
- ・ Allorto, R.-Perrotti, P. B. (1965) *L'educazione ritmica*, Ricordi
- ・ Graziosi, G. (1965) *Introduzione all'ascolto*, Ricordi
- ・ Rattalino, P. (1968) *Gli strumenti musicali*, Ricordi